

# イギリスの階級社会

学籍番号：20627092

専攻：異文化理解

指導教員：牧田東一ゼミ

氏名：近藤 尚

卒業論文提出日：2011年1月16日

# 目次

序章 .....	3
第一章 『イギリスの階級とその起源・歴史』	
第一節：一般的なイギリスの階級制度の区分について.....	4
第二節：階級のその歴史や起源について.....	6
第三節：階級認識から起きた社会的事件を通してみる教育システム.....	7
第二章 『労働問題から見るイギリス階級社会』	
第一節：職業別に見た階級社会.....	9
第二節：階級制度からの脱出.....	12
第三節：20世紀における『階級社会の変化』.....	13
第三章 『衰亡しない階級文化』	
第一節：近年のイギリス国民における階級認識.....	14
第二節：日本とイギリスとの類似点と相違点.....	17
第三節：イギリスの階級認識が衰亡しない2つの理由.....	19
終章 .....	20

## 序章

21世紀の現代において、イギリスに階級制度は存在するのか。現在イギリスに制度化された階級は残っていないし、法律として定められてもいない。しかし依然として、国民の生活の中や国民の意識の中に階級社会というものは存在している。その階級間には積極的な交流はなく、通う学校、愛読する新聞、また英語のアクセントの違いなどからしゃべる言葉まで違うといわれる。しかし、その階級制度による階級社会とは一体どういうものであるかは広く認識されておらず、もしくはかなり誤解されているように感じられる。

階級社会とは一体何なのか。一般的に階級は、イギリス以外の国ではまず経済的な区分として捉えられている。日本においては江戸時代の士農工商がその近い例として挙げられるだろう。しかし、イギリスでは、「階級は単なる経済的観点からする人びとの分類としてだけでなく、生活のあらゆる領域において人びとを区別しうる観念【河合他 1982 : 801】」であるとされ、その認識は異なっているように感じられる。

イギリスにおける階級制度とは、「古いものでは、19世紀のイギリスの批評家マシュー・アーノルドが発表した上流、中流、下層の三分割方式がある。(中略) 社会学者の間では、その後、中流階級が上層、中層、下層の三つに分けられ、下層階級ないし「庶民」は労働者階級と呼ばれるようになった。以来、この五分割が、イギリスの階級制度を考える際によく使われるようになっていく【石川 1993 : 41】」。これをふまえて、階級社会を大きく上から順に分類すると、UPPER CLASS (上流階級)、MIDDLE CLASS (中産階級・中流階級)、WORKING CLASS (労働者階級) と分けることができる。さらに、MIDDLE CLASS はさらに UPPER MIDDLE CLASS (上位中流階級)、MIDDLE MIDDLE CLASS (中位中流階級)、LOWER MIDDLE CLASS (下位中流階級) とされている。

階級社会では、異なる階級と交流することは稀なので、入手した情報などは全てその個人の階級によって限定されてしまう恐れがある。ゆえに、例えばその入手した情報その階級階層内において真実だったとしても、一般的かどうかは定かでないといえるのである。

筆者は 2006 年に、神奈川県青少年日英交流会のイギリス派遣事業プログラムを通して初めてイギリスを訪れた際、現代に未だ根強く残っている階級を肌を感じるがあった。筆者が滞在したホームステイ先の 14 歳の男の子とさえ、一緒に出かけた先のスーパーマーケットの店員の黒人について「英語に訛りがあって変だ」と笑うことがあった。一緒にいた筆者はその当時、その言葉にひどく衝撃を受けたものだった。また、滞在中にロンドンの市街地を歩いていると、スーツを着ているホワイトのイギリス人が際立って多くみられた。しかし、少し路地を入ると路上にはたくさんのホームレスが寝ていたのを鮮明に覚えている。

それと同時に、筆者は階級というものにたいして疑念が生じたのである。まだ 14 歳の少

年できえ、イギリスの階級社会に生きている事実が確かに存在しているということは、何らかの理由があるのではないか。

階級制度については、筆者はその認識として一種の不平等的要素として考えていたところがあった。しかし、今やイギリスという国を表すものの一つになっている階級社会を単純に不平等なものとして捉えるのも間違っているのではないだろうか。どのような社会においても様々な職業があり、それによって生じる所得格差があり、学歴の格差がある。ではなぜ、イギリス社会には未だに深く階級制度として国民に根付いているのか。以上の事柄から筆者が感じたイギリスという長い歴史をもった先進国の「イギリスの階級社会」に焦点をあて調べることで、階級間に生じる壁や、なぜイギリスで階級社会が今も生きているのかについて考えていきたいと思い、今回の研究のテーマに決めたのである。

この論文では、まず第一章でイギリスの階級制度とは何か、歴史・起源などを明らかにしていきたい。第二章では階級によって生じる労働問題、第三章では現在の階級制度の在り方について、同じ先進国である日本と比較していく。終章では、それから導かれるイギリス内の上流階級と労働者階級イギリスに未だ階級制度が根強く残っている理由を自分なりに考察していきたい。

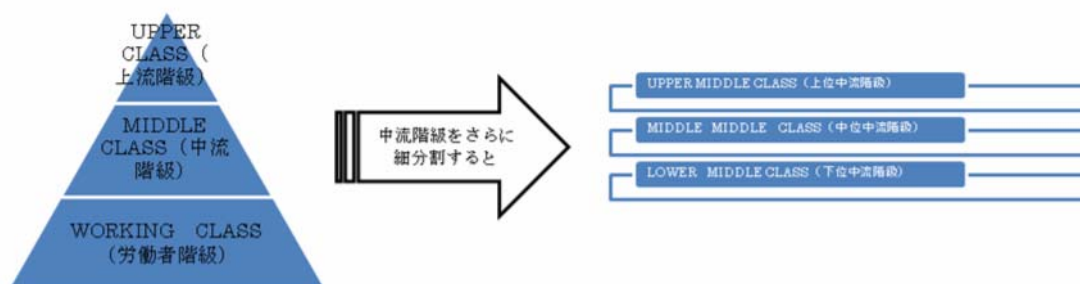
## 第一章：イギリスの階級とその起源・歴史

イギリスの階級社会とは何かを考えると、今まで私たちが捉えていた階級概念は、イギリスにおける階級とは全く異なるということを理解しなければならないだろう。階級は、イギリス以外の多くの国々では経済的な区分として捉えられている。しかし、イギリスにおいて階級とは単に経済的観点からする人々の区分ではなく、家、学校、スポーツ、職業に至る生活のあらゆる領域において人々を区分しうる概念なのである。

### 第一節：一般的なイギリスの階級制度の区分について

イギリスの階級とは、上から大きく UPPER CLASS(上流階級)、MIDDLE CLASS(中流階級)、WORKING CLASS(労働者階級)の三つに分けることが出来る。このうち MIDDLE CLASS は、UPPER MIDDLE CLASS(上位中流)、MIDDLE MIDDLE CLASS(中位中流)、LOWER MIDDLE CLASS(下位中流)の細分化することが出来る。

### 図1 イギリスの階級社会



出典：D. キャナダイン、平田雅博、吉田正広著『イギリスの階級社会』より筆者作成

次にそれぞれどのような人々がその階級を構成しているか見ていきたい。

まずUPPER CLASSは伝統的に仕事をしなくても食べていける人々からなる階級である。主に、王室や貴族、ジェントリ<sup>6</sup>で構成されている。貴族は世襲制で英国王室を頂点として、公爵や伯爵、男爵などと続くものである。基本的に爵位を名乗るのは家長ひとりであり、その爵位は最年長の子供が引き継ぐとされている。これに加え、イギリス国家へ非常に貢献し、国から男爵位が与えられた一代貴族がいる。一代貴族は出身階級にかかわらず与えられるが、爵位が有効なのは本人一代限りである。以前は貴族もジェントリも働くことをせず土地からの収入のみで裕福な生活ができた人達だったが、ここ数十年の間に貴族を取り巻く環境は大きく変わりつつある。以前は、爵位を持つと貴族院(国会の上院)での議席が自動的に保障されたが、現在、自動的に上院議員になれるのは一代貴族のみで、世襲貴族の議席は92席に制限されている。また先祖から受け継いできた莫大な資産に、遺産相続税などの税金が重くのしかかっており、そうしたなかで働かずに暮らしていくための生活費、使用人への手当や、広大な庭園や豪華な館の維持、管理費をどうやって捻出するかが大きな悩みとなっている。そのため今日では貴族の庭園、大邸宅などのなかには、ホテルや大使館などに改装されているもの、アメリカやアラブの大金持ちに買い取られたものが少なくない。また邸宅を一般に公開して参観料を取ったりしている貴族も多い。中には莫大な維持費と相続税などを捻出できずに没落していく貴族もいる。

これらから必ずしも「貴族＝裕福」というわけではないことがわかる。お屋敷はじめ敷地の管理を、歴史的建造物の保護活動を行う慈善団体「ナショナルトラスト」に委託するなどして、やりくりする貴族も多くいる。

次に挙げる MIDDLE CLASSは何らかの商売、あるいは職に就いて収入を得る人々のことを指している。産業革命によって台頭したブルジョア資本家のことであり、労働者ではあるのだが、肉体労働によるものではないということで、WORKING CLASSとは区別されていたのである。つまり、産業資本家(会社経営者)や銀行家など、企業を経営しその利潤を収入

<sup>6</sup> ジェントリ：爵位を持たない土地所有者のこと、貴族の次男以下などがこれにあたる。

としていた人達や、弁護士、医師、研究者などの高度な専門的職業人ことを指す。MIDDLE CLASS の人びとは貯金をして自分の子を名門の私立のパブリック・スクールに入れたがり、子供に英才教育を行ったり、現代社会の新しい傾向にいちばんに反応したりするなど、現在の日本の一般家庭と似ている点がみられると筆者は感じている。

最後は WORKING CLASS である。WORKING CLASS は主に肉体労働者など、俸給と引き換えに雇い主に労働力を売って金銭を稼いだプロレタリア労働者からなる階級である。バス運転手や農場労働者、土木作業員、日雇い労働者などを指す。この階級の人々は新しいものに対して疑いの念を抱いたり、閉鎖的で保守的であるといわれる。しかしそのため、同じ WORKING CLASS での団結力はとても強い。この階級は他の階級を羨むことなく自分の階級に誇りを持っている人が多く、別世界の人間として淡々と生きていることが大きな特徴の一つであるとされている。

これらはイギリスにおける階級の一般的な認識とされている区分であるが、現在では少々事情が変わってきているように見受けられる。UPPER CLASS の人々であろうとも会社を経営していたり、職についたりしている人々もいるし、また WORKING CLASS を自認しているながらも会社勤めをしている人々もいるからである。

このようにイギリスにおける階級とは単なる社会科学的な定義とは別で、収入だけでは決めることが出来ない極めて文化的な背景から成立しているものであると言えるのである。またこのような階級間の境界線は非常に難しく、どのような特徴を取り上げて分類するかといった基準がイギリス人自身でさえ、はっきりとされていない為、その境目はぼやけており、はっきりと捉えることは難しいのである。ただ唯一はっきりとしていることは、WORKING CLASS がイギリスの階級社会の半分以上を占めているということである。ではそのイギリスの階級の起源となった歴史背景について、次の第二節で述べていきたいと思う

## 第二節 階級のその歴史や起源について

本節では階級の歴史について一般的な認識を述べたのち、その歴史理解の基盤とされるカール・マルクスを例とし、その理論を考察してみたい。

イギリスにおける現在の階級の誕生において MIDDLE CLASS の意識の誕生が大きな要因の一つだと考えられる。イギリス産業革命の中から階級が誕生するのは 18 世紀後半のことであった。この時期のイギリスには前世紀の末、名誉革命によって成立した政治体制が確固として存在していたのである。そこでは国家の政治的主権は、国王と議会に担われていると曖昧なニュアンスで定義されていたのであった。このような奇妙に安定した政治体制から、階級は生まれたとされている。しかし階級の誕生は、少なくとも外見上はこの政治体制にいささかの变化も引き起こさなかった。むしろ、当時のイギリス国家の政治的支配が安定していた為、新しい階級的關係は十分に社会的に広がっていくのを許されたと考えられている。王族と貴族など古くからの支配層は UPPER CLASS と呼ばれるようになり、新しい社会の支配的階級、つまり工業ブルジョワジーは、この UPPER CLASS の下に位置する

MIDDLE CLASS と位置づけられるようになった。MIDDLE CLASS は、経済的には大きな実力を有していたが、自らの経済活動が侵されない限りは政治的支配を伝統的支配層である UPPER CLASS に委ね、自らを MIDDLE と意識するようになったとしている[河合 1982 : 2]。

筆者はこの曖昧かつ少し大胆な階級制度の歴史を考察するにあたり、もしこの時、MIDDLE CLASS が UPPER CLASS と争っていたら、UPPER CLASS は負け、現在までその名が残らなかったかもしれないと考えている。

このような階級社会、階級意識の成り立ちを述べる上で重要な人物がカール・マルクスであると筆者は認識している。

#### カール・マルクス

マルクスは「階級」や「階級闘争」を、社会の物質的基盤＝下部構造＝経済を分析するために見出し、社会科学用語というべきものであるとした。マルクスにとっての社会とは、諸階級の分裂に基づいたものであった。マルクスはかつて「歴史の早い時期には、われわれは、ほとんどどこでも社会が種々の身分に、社会的地位のさまざまな段階に、完全にわかれているのを見出す[K. マルクス、F. エンゲルス、1850年: 42]。」と発言している。これを考察するに、マルクスは古代ローマ時代から階級闘争の歴史が始まるとしているのであり、そしてこの古代的時代における階級闘争は、市民と奴隷に相当し、以後、封建社会では、封建領主と農奴、資本主義社会では近代ブルジョアと労働者、と続いていくというのが、支配階級と被支配階級間の階級闘争の歴史であるとマルクスは考えた、筆者は理解する。

マルクスは、個々人を生産手段との異なる関係に応じて、集団ごとにまとめ、分類したのである。この時生まれた人間社会を構成する三つの基本的な階級は、数世紀にわたり闘争を繰り返した。その荒れ狂った三者間の闘争の中にこそ、歴史過程の重要な原動力が見出される[平田：イギリスの階級社会 3]と考えている。言い換えれば、ヨーロッパの全歴史が階級闘争の歴史であるとマルクスは考えたわけである。

生産様式の変革により、階級及び階級支配のための機関としての国家は消滅すると考えたのがマルクス主義の考え方であった。

#### 第三節：階級認識から起きた社会的事件を通してみる教育システム

2000年5月、ローラ・スペンス事件がイギリス各地のメディアで取り上げられた。これは英国北部のコンプリヘンシブ（総合中等学校）<sup>7</sup>出身のローラ・スペンスという18歳の少女

---

<sup>7</sup> あらゆる能力の子供が就学する学校である。グラマー・スクールやパブリック・スクールと比較し、階級・学力的に劣るとみなされる

が、前年、オックスフォード大学を受験したところ、その年の暮れに不合格通知を受け取ったというものであった。この不合格通知を受けて、ローラが通っていた学校の校長は、成績優秀なローラが不合格になったのは、ローラがコンプリヘンシブの出身者であることが原因ではないかとマスコミに訴えたのである。この訴えは、総選挙を控えたイギリスの政界にまで持ち込まれ、2000年夏、後にローラ・スペンス事件としてイギリス国民の記憶に残る一大議論を巻き起こしたのである。その後、与党労働党の財務大臣ゴードン・ブラウンがローラの不合格についてのマスコミ報道を取り上げ、階級社会と深く結びついたオックスフォード大学のエリート意識を強く非難する発言をしたことが引き金となり、多くの労働党の閣僚達が次々とブラウンの発言を支持した。このような非難をうけてオックスフォード大学は、合格判定には成績以外の要素は一切考慮されていないと主張した。政界でのこの騒動は、真相が明らかにならないまま収束していった。結局、ローラは、奨学金を得てアメリカのハーバード大学に進学し、その後、当時沈黙を守っていたローラ自身がマスコミの取材で、面接で上手く話せなかったのが不合格の要因ではないかと、彼女の不合格が一大騒動に発展したことに大きな戸惑いを見せたものであった。第一節で述べたように、イギリス人がその階級を認識する手段の一つに挙げられるのが英語のアクセントであるのではないかと筆者は推測している。

一生徒の大学不合格が政治家を巻き込んだこのような騒動に発展したのは、イギリスの教育システムが階級の問題と密接に関わってきた背景に原因があると考えられる。現在でもオックスフォード、ケンブリッジといった名門大学に入学する生徒の多くは、圧倒的にパブリック・スクール出身者である。

パブリック・スクールとは、UPPER MIDDLE CLASS以上の子弟を対象とした英国トップクラスの男子の寄宿制の名門私立校の総称である。その創立は古いもので14世紀に遡る。元来、聖職者を目指すLOWER MIDDLE CLASSの子弟を対象に設立されたが、18世紀頃には、MIDDLE CLASS以上の家庭の子供が通う名門校になった。このようなパブリック・スクールの他に、現在は、女子の寄宿生の私立校などを含む全ての私立学校を指すものとして、公立学校と区別して、パブリック・スクールという言葉が使われることが多い。英国大使館の統計によれば、イングランドで私立学校に通う生徒の割合は全生徒の約7%、スコットランドにおいては約4%とも言われ、11歳あるいは13歳になると受験し進学する[駐日英国大使館HP、2010, 10, 01]。一方、ローラの通うコンプリヘンシブは、地域の全ての子供が入学できる学校である。以上のことから、英国社会では、私立学校に通う生徒とコンプリヘンシブに通う生徒の違いが、家庭の階級格差と結びつけて考えられやすいと筆者は感じた。真相はどうかであれ、英国最高学府の双璧の一つオックスフォード大学がコンプリヘンシブ出身者を不合格にしたという訴えにマスコミや政治家が飛びついたのには、このような背景があったのである。またそれらの背景には必ずイギリス特有の階級意識の問題が生じているのも事実であるように筆者は感じている。



イギリスの階級とは、現在は人々の意識の中に存在しているものであり、その定義を見極めることは困難である。またその歴史的な背景などから理解できるように複雑かつ曖昧なものであり単純に言い表すことは難しく、その周りにある問題点も未だに在ることが認識できる。ローラ・スペンス事件を通じて、階級による学校問題によってその後の就職にも影響があるように感じられた。

第二章では人々の暮らしにとってとても大きな意味を持つ労働問題に焦点を当てて論述していき、20世紀以降に起きた階級制度の変化も考察していく。

## 第二章：労働問題から見るイギリス階級社会

前章では階級社会の成り立ち、歴史からその構造を理解し、イギリス人の中に未だ深く根付いている階級意識から、現代のイギリス社会に及ぼしている影響を「学校」を軸に考察してきた。イギリス人の階級意識は表面的ではなく、内面的には確実に存在すると推測できたのである。本章では、階級意識が労働に及ぼす問題を論じていき、その階級からの脱出に成功してきた過去の著名人について述べていく。しかし、階級別に職業を分類するのは非常に困難であると筆者は考えている。そのため、81年に調査された基準と新たに2001年に作られた基準を比較し、筆者自身の職業基準を論じていきたい。

### 第一節：職業別に見た階級社会

階級問題を取り上げる際、「イギリスの階級の指標として人びとに最も重要視されているのは職業[河合他、：824]。」と考えられているように、階級社会と職業問題は切り離せない事項である。このように、職業は人びとに最も重要視されているイギリスの階級の指標である。

まず、イギリスの戸籍本署が実施している国勢調査の「階級の分類」というものが存在している。またこの国勢調査では、UPPER CLASSの貴族を除いて、社会階級を世帯主の職業によって、次の七つに分類する。

図1：社会階級別の職業分類

社会階級Ⅰ	専門職
社会階級Ⅱ	中間職
社会階級ⅢA	非筋肉労働の熟練職
社会階級ⅢB	筋肉労働の熟練職
社会階級Ⅳ	半熟練職
社会階級Ⅴ	非熟練職
経済活動にたずさわっていない者	

出典：石川謙次郎『変わるイギリス変わらないイギリス』を参照のうえ筆者作成

次に、81年の国勢調査の結果から上記の社会階級別にそれぞれ職業を当てはめてみる。

図2：図1から職種の種類

[社会階級Ⅰ]	法廷弁護士、判事、医師、大学教授・研究者、建築家。
[社会階級Ⅱ]	国会議員、事業経営者、会社重役、農場主、新聞記者、教師、警部
[社会階級ⅢA]	不動産業者、製図工、写真家、銀行事務員、秘書、警官
[社会階級ⅢB]	電気技師、バス運転手、コック、大工、家具職人、配管工
[社会階級Ⅴ]	ビル掃除人、土木作業員、窓掃除人、日雇い労働者

出典：石川謙次郎『変わるイギリス変わらないイギリス』を参照のうえ筆者作成

上記の表を、前に挙げた五つの分類に当てはめると、UPPER MIDDLE CLASS が I MIDDLE MIDDLE CLASS が II、LOWER MIDDLE CLASS が III A、WORKING CLASS が III B 以下である。表から社会階級を考察する上で、MIDDLE CLASS の職業基準は曖昧であるように感じられる。そのため、MIDDLE CLASS の職業区分においてはその生活様式や文化をふまえる必要があるように感じられる。文化の違いの中に存在している言葉の問題が大きな要因であると、筆者は考えている。

次に、The UK office of National Statistics(ONS)が、2001年に新しく作り出した社会経済の分類を見ていく。

図4：2001年に新たに作りだした社会経済の分類

Group	Description	過去の階級分類
1	Higher Professional and Managerial	A
2	Lower Managerial and Professional	B
3	Intermediate occupations	C1 and C2
4	Small Employers and non professional self-employed	C1 and C2
5	Lower Supervisory and technical	C1 and C2
6	Semi Routine Occupations	D
7	Routine Occupations	D
8	Long term unemployed	E

出典：The UK office of National Statistics より筆者作成

上記に記載されている過去の階級の分類は以下の表に基づいているものである。

図 5：上記の図 4 の補足資料

Grade	Status	仕事
A	Upper middle class	Higher managerial, administrative or professional
B	Middle class	Intermediate managerial, administrative or professional
C1	Lower middle class	Supervisory or clerical and junior managerial, administrative or professional
C2	Skilled working class	Skilled manual workers
D	Working class	Semi and unskilled manual workers
E	those at lowest level of subsistence	Casual or lowest grade workers, pensioners and others who depend on the state for their income

出典：The UK office of National Statistics より筆者作成

階級と労働は根強くつながっているものである。現在のイギリスにおいて筆者は、階級による目に見えた差別はないが、そもそも WORKING CLASS の人は高等教育を受ける比率が低い上に、仮に高学歴であっても、面接の際に、発音で、出身階級がわかってしまう事があり、面接する側に偏見があれば、それが結果の違いにつながる事は在りうるのではないかと感じたのである。実際に、筆者はイギリスに滞在中に参加したボランティア団体でも、訛りをひどく気にしている白人の女性に出会ったことがあったのである。

階級の指標として、第 3 には、「住居、英語の話し方、日常の作法などの生活様式[河合 1982 : 824]」とあるように、イギリスの労働問題を論じる際には、文化やその生活様式が必ず関わってくる。前章でも述べてきたように階級間の移動は可能ではあるが、文化的にその階級から抜け出すことは出来ないとされている。第二節では、階級分類の中から脱出した人々を考察していきたい。

## 第二節：階級制度から脱出

ここでは、主に WORKING CLASS からの脱出に成功した人々を例に挙げていく。初めに、過去約 300 年続いていた階級制度は第二次世界大戦後にその社会構造が揺らぎ始めたと言われている歴史的な背景を簡潔に述べていく。新しい社会に生まれ育った子どもたちは、ち

ようど 1950 年から 70 年にかけて青年期を迎えることになった。青年期を迎えた彼らが自身のアイデンティティを形成する際に用いたのが、ロック音楽やファッションであったのだ。19 世紀以降、それぞれの階級において全く違う文化を発達させてきた。リチャード・ホガートは、1910 年代から 50 年代にかけてのイギリス社会を WORKING CLASS の文化の視点に立って見て、「やつらとおれたち」という言葉で表している。WORKING CLASS の人々は自分たちを「おれたち—us」、それ以外の人々を「やつら—them」と呼ぶものであった。ホガートは「おれたち」にとって「やつら」は何なのか、次のように述べている。

『頭にいる連中』、『ずっと上の方にいるやつら』、つまり失業手当をくれ、呼びつけ、戦争に行けといい、罰金を取り、30 年代には失業手当をもらえる家計調査基準に合格するために家族を分裂させた連中、『とにかくそこから逃げられない奴』『本気で信用できねえやつら』(中略)『隙さえありやあ、いつでも人をやっつける』『みんなグルになってやがる』(中略)連中なのだ[ホガート 1974 : 64]

しかしながら、50 年代以降の WORKING CLASS の若者たちは、その階級差が緩和化しつつある社会に生きており、「おれたち」のような閉鎖的な意識を強く持つ親たちとの間で新しいジェネレーション・ギャップを感じだしていた。

「1950 年代の子どもは 1930 年代の親とは違う経験を持った。新しい余暇の機会があったからだ。十代は使える金をもち、それで新しいものを買った。そして隣人や階級的な関心を越えた大衆文化に参加した[フリス 1991 : 219]」

以上の点から 1950 年代以降の子どもたちは、このジェネレーション・ギャップを越えるために、ロック音楽のような自らを強く表現することが必要だったのであると、筆者は感じている。

労働者階級出身からの脱出に成功した例としてあげられるのは、ザ・ビートルズ<sup>8</sup>や OASIS のノエル・ギャラガー兄弟、そしてフットボール選手のデイビットベッカムなどである。ここでは、ザ・ビートルズの例を取り上げていきたい。

ザ・ビートルズの 4 人はジョージの家を除き、労働者階級出身であった。中でも、リンゴ・スターは労働者階級地区であったリヴァプールにおいてももっとも貧しい地区の出身であった。ザ・ビートルズは当時アメリカ音楽であったロックをいち早く取り入れ、世界的なロックバンドへと成長していったのである。このように、国家に対して、多大な経済的貢献があったという理由により 1965 年 6 月 11 日、大英帝国勲章<sup>9</sup>がザ・ビートルズに

---

<sup>8</sup> イギリスを代表するロックバンドであり、そのメンバーはジョン・レノン、ポール。マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スターである。

<sup>9</sup> Most Excellent Order of The British Empire と言われ、省略され MBE と言われている。

贈られることが発表されたのである。これが、引き金となりこの発表を受けてそれまで叙勲されていた元軍人の人々が勲章の返還を始めたという事件が起きたのである。しかし、予定通り 1965 年 10 月 26 日、バッキンガム宮殿でザ・ビートルズはエリザベス女王から勲章を授与された。また、バンドの解散後、1997 年にポール・マッカートニーはナイトに叙勲され「sir/サー」の称号が贈られた。その後、ジョージ・マーティンもナイトの称号を贈られている。現在、ビートルズ 4 人において 2 人がナイトの称号を授与され、労働者階級からの脱出に成功しているのである。

イギリスの有名なジョークの一つに、「労働者階級から成功する方法は、サッカー選手かミュージシャンになること」という言葉がある。

第三節では、ビートルズのように階級の枠からの脱出に成功した者たちがいるにも関わらず、今なお残っている階級社会における 20 世紀以降の変化について考察していきたい。

### 第三節：20 世紀における『階級社会』の変化

20 世紀における変化の一つに、選挙権の拡大が挙げられる。18 世紀半ばの産業革命で中産階級が生まれたイギリスでは、19 世紀、社会構造の変化に伴い選挙制度改正が促進された。まず 1832 年、第一次選挙法改正では MIDDLE CLASS に選挙権を拡大させた。これにより、有権者数は約 50% 増加したが、地主貴族主体の下院の構成はなかなか変わらず、38 年以降、WORKING CLASS を中心に、「チャーチスト運動<sup>10</sup>」が活発化した。19 世紀後半である 1867 年、第二次選挙法改正され都市労働者に選挙権があたえられて、有権者数は 106 万人から 200 万人に増加した。また、1884 年年には、第三次選挙法改正され、農業労働者と鉱山労働者に選挙権付与されて、有権者数は 440 万人となったのである。

このような、選挙権の拡大などを受けて 1990 年までに、イギリスの人口の 4 分の 3 がその都市部へと居住し、その内の被雇用者の 4 分の 3 が肉体労働者へとなったのである。このように、イギリスは世界で最も都市化され、工業化された国民となっていった。

第二章では職業を中心に階級制度を考察していき、そこからの脱出に成功してきた例、20 世紀における階級変化について述べてきた。この章のまとめとして、筆者は、イギリスにおける職業とは階級から直接的に結び付くことではなく、イギリス人が自身のアイデンティティである階級を再認識する為に用いる指標であると考察した。その生まれた階級によって文化や生活様式、や英語の訛りに違いが生まれてくるのだと感じたためである。ビートルズのように、労働者階級出身でも勲章を受勲出来たことは、伝統文化を重んじるとされるイギリスの階級社会の歴史において、大きな揺らぎになったのではないかと、筆者は考えている。

第三章では、なぜ未だに衰亡しないイギリスの階級制度について、かつて身分制度が存

---

<sup>10</sup>普通選挙や無記名投票の導入など、選挙制度の民主化を求めるもの

在していた日本と比較を通し、その理由と問題点を筆者自身でその結論を見定めていきたい。

### 第三章；衰亡しない階級文化

第一章で述べてきたように、イギリスの階級社会はその歴史の根は深く、特に 1979 年のサッチャー首相<sup>11</sup>就任以降イギリス国内における階級格差、認識は拡大傾向にあったとされている。そのように階級というものは、未だイギリス国民にとって非常に大きな意味を持つと筆者は考えている。第一章、第二章を通してイギリスにおける階級制度を考察し、筆者は階級をイギリス国内で『制度化された文化』として考えている。日本にもかつて士農工商という身分制度が存在していたが、明治維新や第二次大戦の敗北を経て社会全体が大きく変化した事が大きな分岐となっているのだろう。では、なぜイギリスにはそのような変革が起こり得なかったのか。なぜ階級文化が存在し続けるのか。第三章ではそれらを日本との対比を通し、その理由を筆者独自の見解で考察していきたい。

#### 第一節：近年のイギリス国民における階級認識

イギリス国民にとっての階級認識を明確に一つの答えとして導くことは不可能であると筆者は考えている。第二章で述べたが、階級とはイギリス国民自身のアイデンティティを構成する重要な要素として筆者は捉えているからである。おそらく大多数のイギリス国民は自分がどの階級に属しているかということを感じているが、こうした階級に対する考え方は世代によっても差があり、少しずつではあるが確実に変わってきていると筆者は考えている。

そのため筆者は友人でイギリスに 3 年間、在住している日本人の女性に彼女が肌で感じたり、また体験したりした階級認識についてインタビューを実施した(2010 年 12 月 27 日、国際電話にて実施)。彼女は現在、ロンドン市内の輸入雑貨を取り扱っているお店でパートタイマーとして働いている。彼女が勤めている店舗の顧客の層は中流階級以上であり、まず労働者階級の人の来店はないという。そこで筆者は、彼女にまず英語の発音についてインタビューをした。

英語のアクセントとは、イギリス国民にとって最も重要なアイデンティティの見分け方の一つであると筆者は考えている。彼女自身の見解の一つとして、ロンドンのイースト・

---

<sup>11</sup> マーガレット・サッチャー。下層中流階級出身の第 71 代首相 (1979 年—1990 年) であり、実施した政治改革により中流階級より下が没落し上流階級との格差を広げたとされている。

エンドに居住している下層の人々が話す英語は聞き取りにくいという点があった。なぜなら、現地ではその地域の英語はコックニーと言われ、『H』の発音をせず、また母音を混ぜて発音をするからということである。また話し方にも差があり、お店に来店する上流階級の人々は全体的にゆっくりと呼吸をしながら吃るように話すとしている。イギリス国内において標準英語は大きく「上流」と「非上流」に分けられ、クイーンズ・イングリッシュ、BBC放送で使われているBBC英語などが「上流」といわれている。下層中流階級出身のサッチャー元首相の英語は明瞭できれいな英語であるといわれていたが、オックスフォード大学卒の彼女でさえ、個人教授でクイーンズ・イングリッシュを習得したといわれている。イギリスでは言葉というものでその人の背景を判断する、ということがこのサッチャー元首相の実体験からも読み取ることが出来る。オックスフォード大学という名門大学を卒業という学歴だけでは覆い隠す事が出来ない階級社会の一つの例である。

次に福祉施設の違いについて質問をし、その中でイギリスの医療における階級格差について話してくれた。まず病院には完全無料の公立病院か、有料の民間病院の大きく分けて二種類が存在するという。労働者階級の利用する公立の病院には通常、予約なしや、ローカルのかかりつけの医師の紹介状なしで直接行っても、診察をしてもらえない。しかも予約が取れないは日常的であるという。その一方、有料の民間病院では手厚い処置が約束され、このような手間もなく診療を受けることができる。しかし、患者が病院に支払う医療費は高額になるため、低所得者すなわち下層中流階級より下の労働者階級の人々はその恩恵にあずかることは出来ず、主な利用者は上層中流階級以上であると彼女は答えた。その起源を調べてみると、これはマーガレット・サッチャー政権が福祉国家の解体を掲げ、医療費抑制政策を採ったためであるということが考えられた。医療問題において筆者は日本より欧米のそれがより優れていると考えていたが、そこには階級社会から生じた収入の格差が大きく関係していると筆者自身感じたのである。

最後にパブについて質問をしてみた。パブはイギリス国民にとっての他人との交流の場としての大きな役割を担っていると感じたためである。外国人である彼女は基本的にパブを選ぶ際、特別に意識をすることはないが、イギリス国民にとってその階級によって入店の仕方まで異なるとしている。店内も二つに仕切られているお店が多く存在し、主に中流階級以上は店内に設置してあるソファを利用し、労働者階級など下層階級はカウンターを利用するのが一般的である。そして、彼女は最後に外見的にみたイギリスの階級認識について話してくれた。外見的とは、一般的に上流階級の人々の方が労働者階級の人々よりも痩せていてスマートだと付け加えたのである。これは、筆者にとっても過去イギリスを訪れた際に感じ疑問に感じたことの一つでもあった。平均的な収入も労働者階級と上流階級では歴前とした格差が存在している。しかし、収入が多い上流階級の者がスマートで反対に労働者階級の人たちの体格が大きいのはなぜなのだろう。そのような疑問からもやはり、上流階級と労働者階級では、その食生活の違いからその見た目、体格までも影響を与えていくという根拠のない驚きも発見できたのである。この外見的な比較は「ペディグリー

の違う代々の英国労働者階級は、貴族と違って確かに小さく、太っている人が多い【高尾、1997：176】とあるように、ペディグリー、つまり家柄も階級を意識し、再認識させるきっかけとなっていると筆者は感じたのである。以上のインタビューを通して、生活する上でその存在は決して目に見えるものではないが肌で認識するものであると筆者は認識したのである。

階級社会がもたらす収入の格差は未だに深く残って、教育や職種にまで影響を及ぼしている事はその認識として事実であると筆者は確信している。しかし、序章で述べたようにイギリス国民の特に上流階級の人々の階級に対する認識は、収入だけではない。やはりその血統、血筋も大きく関わって存在していると筆者は考えている。「2年ほど前、BBCテレビで英国の階級意識を考え直すという特集があった。そこに登場したある貴族の老婦人が言ったものだ。「そんな事は不可能よ。ペディグリー（血統）が違うもの。労働者階級の者がわれわれと同等になれるはずがない。論外よ。！」【高橋慶子、1998：175】とある様に、イギリス国民の特に上流階級には、それは事実として存在し続けているように筆者は感じられた。血統と学歴は、イギリス国内において強く結ばれている。

図6：階級別にみた教育から労働への流れの格差

階級	教育	仕事
Upper Class	有名大学卒(オックスフォードなど)	資産家を中心 (地主・貴族)
Middle Class	大学に進学	ホワイトカラー (公務員など)
Working Class	大学進学は稀	ブルーカラー (肉体労働中心)

出典：加瀬英明『イギリス 衰亡しない伝統国家』より筆者作成

上記の図6のように、血統や家柄で進学する学校つまり、パブリック・スクールへの入学を可能にするかどうか異なってくるからである。しかし「パブリック・スクールが活力を保ってきたのは、新しい血を受け入れてきたからだ【加瀬、2000、80】」というように、サッチャー夫人やメージャー前首相<sup>12</sup>が下から上流階級に仲間入りするものが珍しくはないという事も事実である。そういった上流階級の階級認識がイギリス国内における階級格差問題を無くさせない要因の一つになっていると筆者は考えたのである。イギリス国民の中にあり続ける階級認識は、人々の生活のありとあらゆる場面に存在していることが今回のインタビューで筆者は感じられた。第二節では、かつては同じ階級社会であった日本とイギリスがなぜ違う道を進んだのか、その相違点とまた類似点について考察していきたい

<sup>12</sup> ジョン・メージャー。1990年から1997年までイギリスで任期を務めた第72代首相である。高校中退など様々な経験を通し、サッチャーの後継者として首相に就任した。



と思う。

## 第二節：日本とイギリスとの類似点と相違点

「イギリス人は世界の中で、日本人と気質や文化最も共通している国民である。【加瀬、2000：4】」このように日本とイギリスを類似している国同士であるとするところがある。筆者もそのひとりである。この節では、このような類似点を一つ一つ考察していきたい。

イギリス人がよく日本との類似点として挙げるものに長い伝統のある立憲君主制がある。イギリスの階級制度を知る上で王室の存在なしで学ぶことが出来ない程、その存在意味は大きい。しかし、日本にも階級制度を引き起こしそうな皇室が存在しているが、なぜ日本国民は以前存在していたはずの身分制度を再認識しないのだろうか。イギリス国家元首は名目上、国王または女王である。彼らは選挙で選ばれるわけではなく、王室の長男または長女に生まれることによってその座につく。日本の立憲君主制も表面上は同じように存在していると筆者は考えている。では、その立憲君主制において双方に特別な位置づけがされている皇室と王室の違いを考察していきたい。その二つは表面的に類似しているようでその実情は異なっている事が考えられる。まず、日本における天皇という存在は国民にとって「別格の存在【加瀬、107：10】」として認識されている。また日本の天皇に対する認識において「お召艇はお召艦を離れ、(中略)道筋の人々は一様に大地にひれ伏し、その姿を拝する者は一人もいない。【西山、1998】」とし、同じ人間としてではなくやはり日本国民にとって天皇という位置づけは国の象徴であり、現在に至るまでその認識は決して揺るいでいないのである。次にイギリスの王室について考察してみることにする。「われわれがイギリスの王族を迎える際には歓喜、喝采、微笑(中略)くつろいだ雰囲気がかもし出される【西山、1998】」とし、王室は日本の場合とは異なり、国民の間に王室自ら溶け込もうとするように感じられる。日本において皇室と国民は一体感が強く、イギリスの王族のように国民に向かいパフォーマンスを行う必要なく、それぞれの見解は対照的であるようにも感じられる。

また、日本には、かつてイギリスの階級制度に類似した華族制度が存在していた。日本における貴族の歴史を概観すると、ヤマト王権期の豪族層に由来する古代貴族がまず形成された後、平安時代前期には従来の古代貴族に代わって藤原氏や源氏が上流貴族層を占めていった事がまず挙げられる。次に中世前期にこれらを母体とする公家層が形成された。公家層は、中世後期以降、経済的実権と政治的実権を喪失しつつも、明治維新时期まで存続した。一方、中世には武士階級の最上位層(武家棟梁)が貴族化する動きを継続させておき、近世に入ると家格の固定に伴って将軍家や大名層が武家貴族を形成した。明治維新时期に至り、公家貴族と武家貴族を中心とする上流階級が華族へと移行したが、太平洋戦争での敗戦に伴い華族制度は廃止され、日本の貴族は事実上消滅していったと考えられる。

これは、戦後、平等と志向とするアメリカ合衆国に占領されたため、これらの貴族制度が民主化政策によって廃止された為だと考えられるだろう。これに対し、イギリスは現在

に至るまで、一度も本土を他国によって占領されておらず、外部の勢力によって支配階級の解体をされていないのである。このため、イギリスには階級文化が未だに消滅せずに残っている大きな理由として挙げられるだろう。

次に挙げるのは、教育についてである。日本も近年問題となっている収入格差は、その拡大化により教育の分野へもその影響は大きくなっている。イギリスにも階級制度から生じる教育問題があるが、日本の場合、その問題の大部分が所得、つまり金銭的な理由が占めているのではないだろうか。それに対し、イギリスにおけるそれは単純な金銭的問題では収まらなると筆者は感じている。前節で論じたように、イギリスの教育とはその生まれながらの階級によって大部分が決められているからである。階級社会であるが故に存在する血統、家柄という問題が生じてくると考えるのである。学校や環境によって、教育がその後の人生における生涯収入が大きく格差が広がるという点では、類似しているとも言う事が出来る。

次に挙げるのは労働問題である。企業の採用の在り方においては日本とイギリスは大きく異なっていると筆者は考えている。「日本の企業のように、新規採用したスタッフを、企業に有用な人材に養成しようとするところは非常に少ない【高尾、1997：172】」というように、日本では採用の多くを新卒採用で占めており、その多くは学歴により判断されると筆者は考えている。日本の大部分の企業は、若くて学歴が伴っているのであれば入社させ会社自ら研修を通し成長させていくと感じられる。しかしその一方、経験者を中途採用する企業も年々増加しており、2004年4月から2007年3月に入社した採用数の内、中途採用された比率は下記の表のように2割から3割が最も多く全体の26パーセントと約4分の1を占めている。

図7：日本の主要企業における中途採用のウェイト

0～1割未満	22%
2～3割未満	25%
9～10割未満	3%
無回答	1%

出典：『東洋経済』のホームページより筆者作成

それに対し、イギリス社会の就職活動において最も必要な条件は学歴よりむしろ経験である。「この国では学校を卒業しても、多くの場合、そこで就職の道が閉ざされてしまっている【高尾、1997：174】」とされ、国民の仕事に対する認識は日本国民とは異なった部分から始まる。そのため就職がかなった後も、よりよい職場を求め培った経験をもとに就職活動を行う傾向にあると考えられる。日本においては年功序列という制度があったことか

ら、一つの会社に勤続し定年まで同じ会社に尽くす人達が多く、イギリスとは大きく異なっているように感じられる。日本と比較してみても、職場に対する不満などからストライキなどが後を絶たないのである。日本の企業において上司や部下は立場は異なるが一丸となって会社の為に働くのが理想とされているのに対し、イギリスの上司は「仕事しない上司【高尾、1997：175】」と評され、一般的認識度として命令するか監視する者というように、両国では相違点の一つとして挙げる事が出来るだろう。しかし日本とイギリスには職業分野において一部に類似点が見られる。イギリスにおいて、階級別に職業分別をされていることは、第二章にて研究をした。日本においても、一部の伝統文化の担い手である歌舞伎や華道、茶道の家元などでは職業の世襲制が根強く残っている。

また政治家や医者なども世襲化しやすい職業であると言えるだろう。特に前者(政治家)においては、数年前から二世化の誕生が多くみられ、世論において問題視され大きくメディアで取り上げられることがあった。日本の一部の特殊な職業においては、イギリスにとっても類似した保守的な側面も見られる。

日本にも、イギリスの階級社会のようにかつて身分制度が存在していた。しかし、明治維新や第二次大戦の敗戦など経験し、アメリカナイズされた資本主義への変革が強まったため身分制度は廃止へと進んでいったと、筆者は考えている。しかし、未だに日本にも一部の特殊な職業にて世襲制が強く見られる。このような点において日本とイギリスの両国は似ていると言えるだろう。ではなぜイギリスにもかつての日本と同じように変革の時期へと進んでいかないのだろうか。日本にかつて起きた大きな敗戦を通して他国による文化矯正をされたように、イギリスにも何かきっかけが発起すれば変革へと進むのだろうか。しかし、筆者はイギリスの階級社会は衰亡しない理由があるように考えている。

次の第三節では、イギリスに階級社会が未だに存在し続ける理由を考察していきたい。

### 第三節：イギリスの階級認識が衰亡しない2つの理由

筆者がその衰亡しない理由として挙げることは大きく二つあると考えている。

第1には、イギリスは歴史と伝統を重視する国であるということである。先進国にとって常に新しい意識・技術を生活の中に取り入れることが、日々の生活の中で大きな役割を担っている。日本においても、日々進化し続ける技術に、古き良き時代の建造物は生活の一部に存在することはほぼ無くなってきている。しかし、イギリスにおいて、技術の進歩が進むにつれ過去の文化へ戻っていくような認識がある。例として、イギリスにおいて国民自身が暮らす家の価値についても、より古いものが良いとされているのである。このようなイギリス特有の文化的意識が、階級を古き良き時代の文化として国民自身の中に在り続けようしていると考えられる。また伝統を重んじる傾向は特に上流階級に強いと感じられる。前節で述べたように階級の上層になるにつれ、自らのペディグリーつまり血統を伝統的で由緒正しいものであるとする認識が強いように感じられるのである。上層部分の人々の自

らを位置付ける見解が歴史と伝統にしがみつき、守り続け、下層部分の人々の暮らしに干渉しないことも理由として挙げられる。未だにこの国に階級社会が残っていることの要因の一つとして筆者は考えている。

第 2 に、個人主義的で保守的な面も持っているといわれるイギリス国民一人一人の意識問題が挙げられるだろう。「人は人、自分は自分」という個人主義の考えが、階級社会においては自分とは違う階級の人について考えないということにもつながり、今もなお階級社会が消えない要因となっていると考えられる。イギリスを代表する新聞や雑誌も階級制度や階層社会の在り方を相変わらず人気のある話題として取り上げているが、人々にとってそれは自分以外のものとして捉えられていると筆者は感じているのである。労働者階級の人々にとってでさえ、彼ら自身の生活に納得し、また外からの侵入を嫌う傾向があると感じられる。外から階級を崩壊させることは、イギリスにおいてはまず不可能であると筆者は考えている。彼らは自身の保身を一番に考える国民性を持つことで、外的な侵入をきれいに防いでいるのである。

それは階級制度が存在し続ける要因の一つになっており、衰亡しない理由として挙げられるのである。

イギリス社会にとって、階級の認識を一つに決定づけることは不可能であり、またその必要はないと筆者は感じている。彼らにとって階級は、彼ら自身の保守的な内面的性格を保護する膜のような役割を担っているのである。日本においてかつての身分制度が衰退していき、資本主義が広まってきたのは、日本人が古来より培っている「助け合いの精神」によるものであると筆者は考えている。人と人とのつながりを日本人は古くから大切にしてきたのである。対照的に、イギリス人にとって尊重されるべきと考えるものは自分自身であり、個人主義的であると考える。同上

## 終章

今回、イギリスの階級社会についての研究を通して、イギリス社会において階級が未だに根強く存在し続けている理由を考察した。階級社会とは、イギリス国民にとって文化となっており、生活の一部となっているのである。そのため、英語のアクセントや居住地、また新聞の種類にまで細かく分けられており、労働者階級からの脱却は現在においても大変難しいこと問題であった。

教育面においても、労働者階級と中流階級、上流階級は、それぞれ進学をする学校が異なっている。そのため、労働者階級出身の者が一流大学へ進学をするという事は極めて異例として考えられた。幼いころからの教育が異なっているため、その後の職種も階級別に大きく分類されている。

階級別に分類された職業は、人々に彼ら自身を深く認識させるアイデンティティの役割を大きく担っていると考察できる。これは、日本においても一部の特殊な世襲制を残している職業と類似している。日本には、以前、士農工商や華族制度、地主制度などイギリスの階級制度を真似た身分制度が存在していた。しかし、太平洋戦争を経てそれらの制度は消滅し、現在に至るまで一部を除いてその存在すら忘れかけている国民も多いだろう。しかし、伝統文化の職業や、医者、政治家など世襲が強く存在しているである。

筆者は、序章にて、イギリスの階級社会の存在はイギリス社会において悪の根源であり、なぜそのような階級制度が存在しているのかを当初の問題意識として捉えていた。しかし、今回の研究により、イギリス社会において階級制度とは彼ら自身のアイデンティティの一部であり、この存在を無くすということはイギリス国民の生活そのものを大きく困惑させる要因となると考えている。イギリスと日本には、相違点だけではなく過去、現在における類似点が大きく見出せた。階級とは、筆者が当初考えていた悪の根源ではなく、むしろ外部からは測りきれない文化の象徴を担っているのであろう。

筆者はこの論文テーマにおいて、渡英し現地の労働者階級者が運営しているボランティア団体への参加を予定していたが、今回は様々な事情により日本にて文献を通して研究をしてきた。現地での、意識調査をすることによって、階級そのものを肌で感じ、目で見ることが出来る階級文化を研究することが出来ただろう。次回は、是非現地へと渡り文献からではない、階級を研究していきたい。

参考文献：

- 新井潤美(2001)『階級にとりつかれた人々—英国ミドル・クラスの生活と意見—』中公新書
- 新井潤美(2005)『不機嫌なメアリー・ポピンズ—イギリス小説と映画から読む「階級」』平凡社
- 安東伸介他編、河合秀和他著(1982)『イギリスの生活と文化事典』研究者出版
- Charlton, Katherine, 佐藤実訳(1996)『ロック・ミュージックの歴史(上)』音楽之友社
- D. キャナダイン、平田雅博、吉田正広(2008)『イギリスの階級社会』日本経済評論社
- 石川謙次郎『変わるイギリス変わらないイギリス』(1993)日本放送出版協会
- 井野瀬久美恵(1994)『イギリス文化史入門』昭和堂
- エンゲルス、F. マルクス、K. 向坂逸郎訳(1971)『共産党宣言』岩波文庫
- 林信吾著(2005)『しのびよるネオ階級社会”イギリス化”する日本の格差』平凡社
- 香月利一(1978)『ビートルズ・エピソード 550』立風書房
- 加瀬英明(2000)『イギリス 衰亡しない伝統国家』講談社新書
- 大鷹俊一(1993)『ロックの歴史 ビートルズの時代』シンコー・ミュージック
- 小野修編、田口哲也他(1996)『イギリス文化と国際社会』明石書店
- 高尾慶子(1997)『イギリス人はおかしい』文藝春秋
- 高尾慶子(2006)『やっぱりイギリス人はおかしい』文藝春秋

参考 HP

駐日英国大使館HP <http://ukinjapan.fco.gov.uk/ja> 『UK in Japan』

参考映像資料：

シャロン・マグアニア監督(2001)『ブリジット・ジョーンズの日記』ソニー・ピクチャーズエンタテインメント